第Ⅰ章 泉佐野市の概要

Ⅰ. 自然的・地理的環境

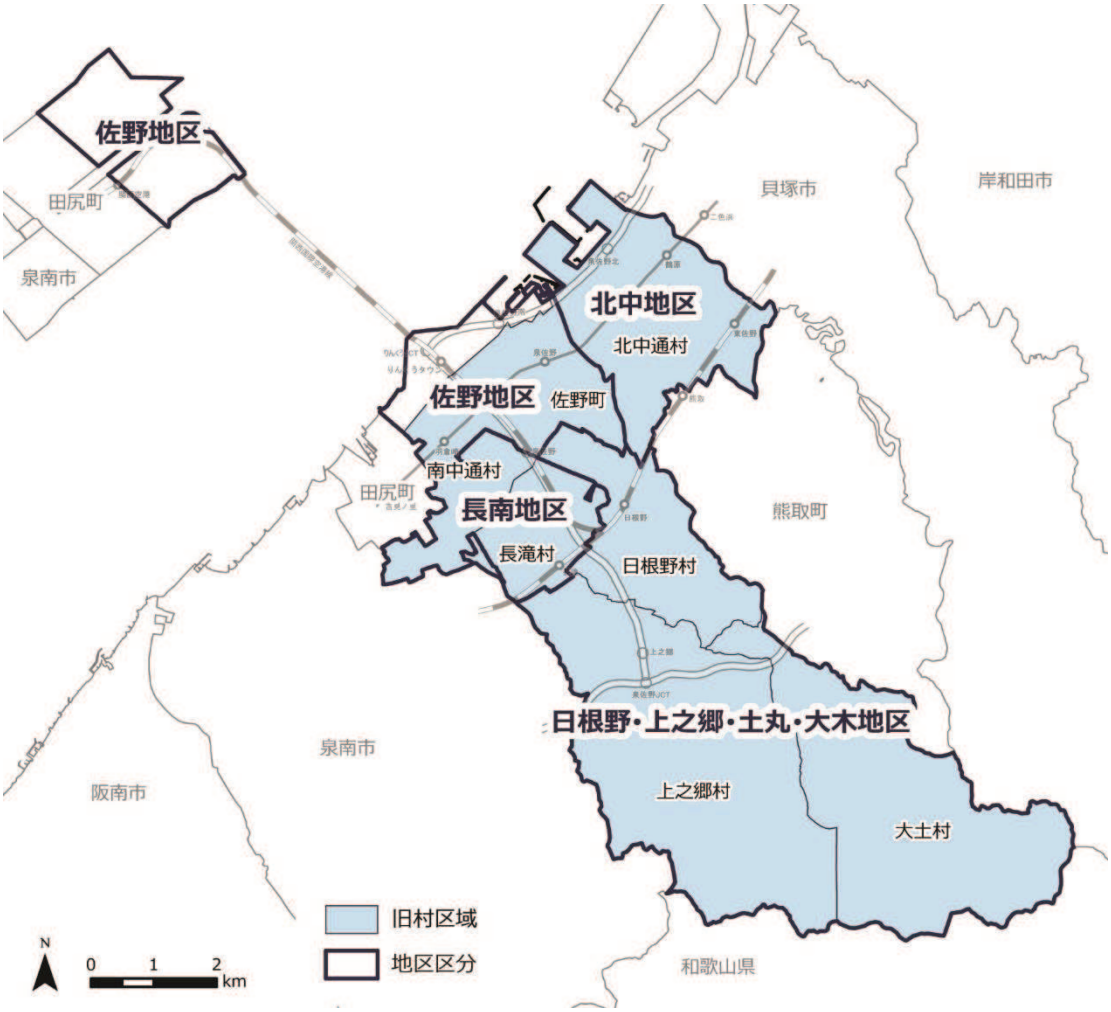
Ⅰ－Ⅰ 位置

泉佐野市は、大阪府の南部、大阪市と和歌山市のほぼ中央に位置し、市域面積 56.51k ㎡で、大阪府南部を東西に貫く細長い市域を形成している。北西は大阪湾に面し、北東は貝塚市、熊取町、南西は田尻町、泉南市、南東は和泉山脈（いずみさんみゃく）の分水界を境として和歌山県に接している。

大阪都心からは約 30～40 ㎞離れた場所に位置し、平成 6 年（1994）に開港した関西国際空港と空港連絡橋でつながっている。関西国際空港を一つの核と位置づける大阪湾地域において重要な位置にある。

市内の地区区分は、中学校区（旧村地域）から長南（ちょうなん）地区、佐野（さの）地区、北中（きたなか）地区、日根野（ひねの）・上之郷（かみのごう）・土丸（つちまる）・大木（おおぎ）地区の 4 地区に区分される。

図Ⅰ－Ⅰ 泉佐野市の位置



図Ⅰ−2 泉佐野市の地区区分

表Ⅰ−1 各地区の旧村名・中学校区

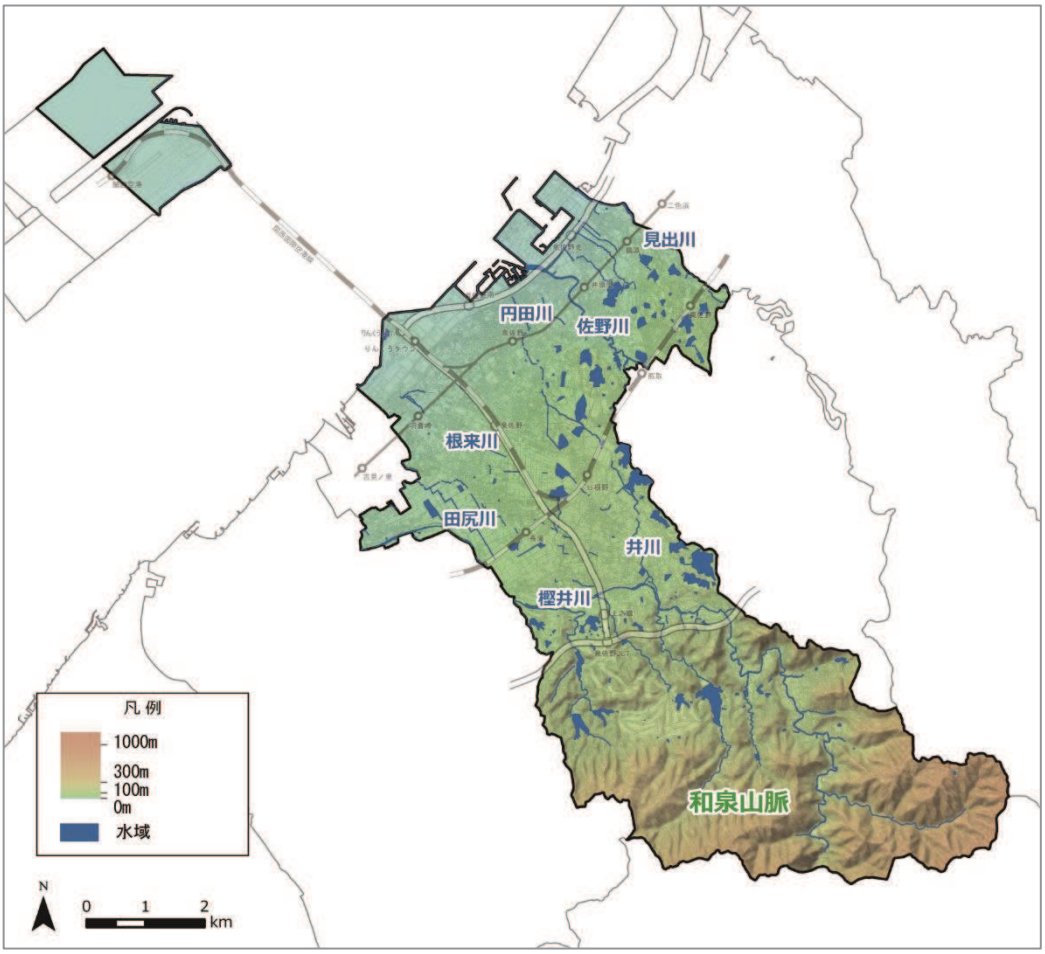
地区名	旧村	中学校区
長南地区	旧長滝村・旧南中通村	長南中学校
佐野地区	旧佐野村	佐野中学校
北中地区	旧北中通村	第三中学校
日根野・上之郷・土丸・大木地区	旧日根野村・旧大土村・旧上之郷村	日根野中学校・新池中学校

Ⅰ－2 地勢

泉佐野市は、「茅渟海」と呼ばれた大阪湾に面し、和泉山脈から北西方向へ傾斜しながら丘陵地、平地が広がっており、山間地は市域の約 4 割を占め、豊かな自然景観を形成している。

和泉地域は少雨の気候であり、河川は流域面積が狭く、彫り込まれているため、古くから水不足に悩まされる地域であった。泉佐野市は、西側の境界を本市最大の河川である樫井川が流れているが、この樫井川を水源として、その流域には早くから人々が住み始め、集落が形成された。また、樫井川及び熊取町にある雨山を発する水系などにより、多くのため池群が形成され、市域を広範囲に潤す重要な水源となっている。しかし、ため池は、昭和の終わりから平成にかけて、市場や長滝など平地部を中心に 5 箇所改廃し、減少している。

南東部の和泉山脈の一部は、金剛生駒紀泉国定公園に指定されている。



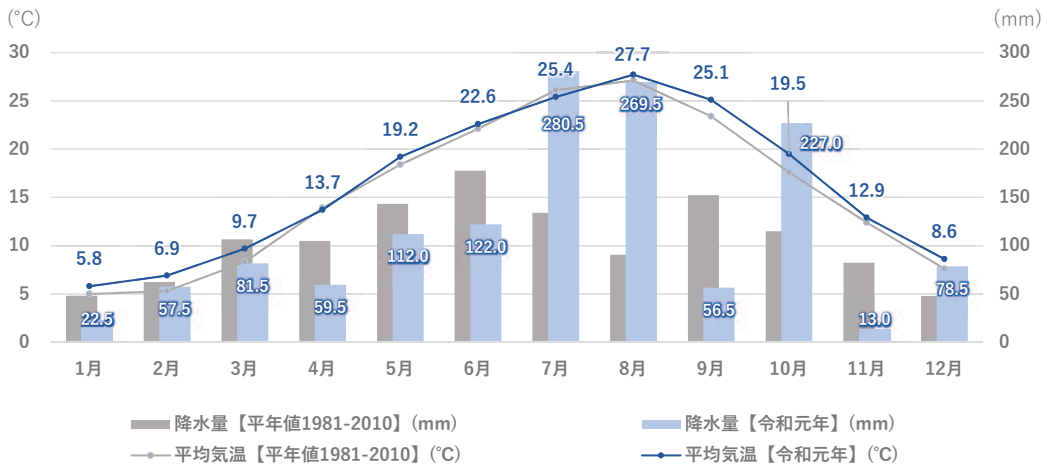
データ出典：地理院タイル（色別標高図）、基盤地図情報（水系）、国土数値情報（交通網・行政界）

図Ⅰ－3 泉佐野市の標高と水系

１－３ 気候

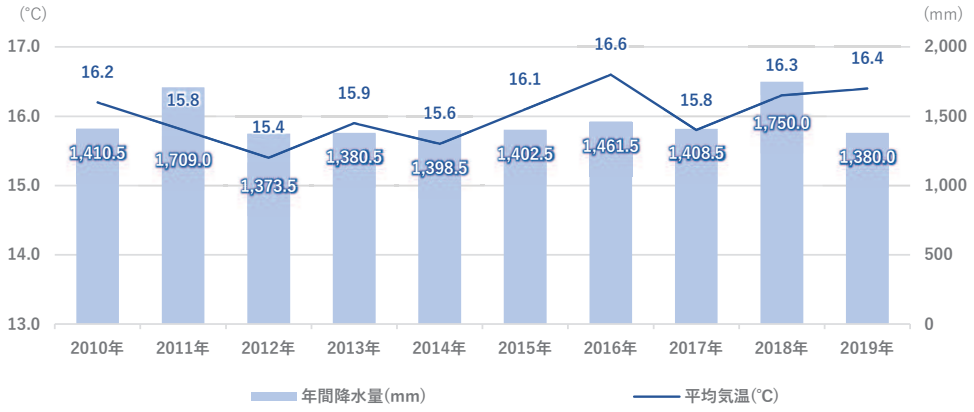
泉州地域は瀬戸内式気候帯に属しているため、比較的温暖少雨な気候である。平年値（1981 年～2010 年）でみると、梅雨の 6 月や台風の多い 9 月の降水量が比較的多く、それ以外の時期は少ない。少雨であり、また河川の流域も狭いため、泉佐野市にはため池が多く造られている。令和元年（2019）の平均気温は 16.4℃、降水量の総量は 1,380mm となっている。

この 10 年間の推移を見ると、年間平均気温は 16℃前後で推移している。年間降水量は、平成 23 年（2011）には 1,709mm、平成 30 年（2018）には 1,750mm となっているが、年平均 1,400mm 前後で推移をしている。近年は平成 30 年台風第 21 号などの強風や豪雨による被害も増えつつあり、歴史文化資源への影響も危惧される。



出典：気象庁 アメダス熊取観測所データ

図１－４ 平均気温と雨量（令和元年（2019）及び平年値（1981～2010））



出典：気象庁 アメダス熊取観測所データ

図１－５ 過去 10 年間の年間平均気温と年間降水量

Ⅰ－4 動植物

泉佐野市南東の山間部では、七宝瀧寺境内を中心とした約 2km に及ぶ谷間に、大阪府古文化紀念物等保存顕彰規則指定名勝犬鳴山として、原生林に近い自然林が保護されている。一部犬鳴林道の開通等により、樹林の伐採が進んでいるが、今なお二瀬川流域の谷、上大木、中大木、下大木集落の背後の谷、滝の池、釜滝池等の深い谷には、スギ、ヒノキの美林が多く残されている。

また、意賀美神社、日根神社、奈加美神社、八幡神社、光泉寺、中庄墓地等の社寺林、溜池密集地帯の丘陵地、船岡山、末広公園、羽倉崎の海浜部の防風林等は、未だ自然が残されている貴重な場所となっている。

特に泉佐野市の自然特性を表わす貴重な特定植物群落は、犬鳴山のシラカシ林があげられ、アラカシ、ツクバネガシ、シラカシ、ウラジロガシ、コジイ、ウバメガシ、カゴノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、リンボク、ネズミモチ等が自生している。犬鳴山七宝瀧寺の参道などで見られる植物として、ビナンカズラ、キジョラン、フジ、ヤマイバラ等を見かける。その他犬鳴を代表する植物として有名なのは、ルリミノキ、カギカズラ、ミヤマトベラ等である。（出典：『泉佐野市植物調査報告（昭和 55 年（1980））』）

日根野の慈眼院に生育している姥桜及び民家に生育しているクスノキ、イスノキは、大阪府の天然記念物に指定されている。また、大阪府内の優れた緑の景観の再発見を目的にした市民投票による「大阪みどりの百選」では、稲倉池、犬鳴山の渓谷、大井関公園が選出されている。

野生動物の生息地は、犬鳴山一帯がムカシトンボ、ゲンジボタルの昆虫類の生息地として、また大池がシジミの生息地としてあげられる。

また、平成 20 年度（2008）には意賀美神社社叢林が、「文化庁ふるさと文化財の森」に認定され、ここの檜皮が全国の文化財建造物の屋根材に供給されている。

図Ⅰ－6 意賀美神社社叢林（文化庁ふるさと文化財の森）

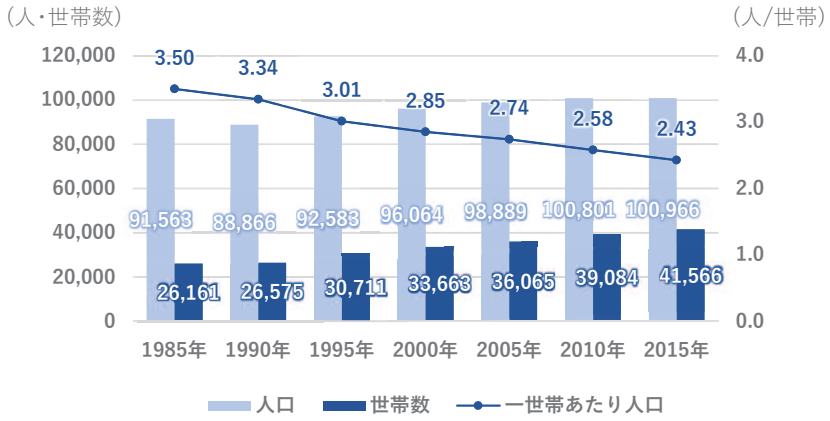
2. 社会的状況

2-1 人口

(1) 人口・世帯数

人口・世帯数は、平成27年（2015）の国勢調査によると、100,966人、41,566世帯となっている（令和2年（2020）9月末時点の住民基本台帳人口は99,836人、47,564世帯）。関西国際空港の開港や地域の開発の影響を受け、平成2年（1990）から平成27年（2015）にかけて増加を続けている。しかし、近年は増加率も下がり、頭打ちの傾向にあるといえる。

世帯数は、昭和60年（1985）以降単身世帯数の増加により、一貫して増加している。そのため、一世帯当たりの人員は減少を続けている。

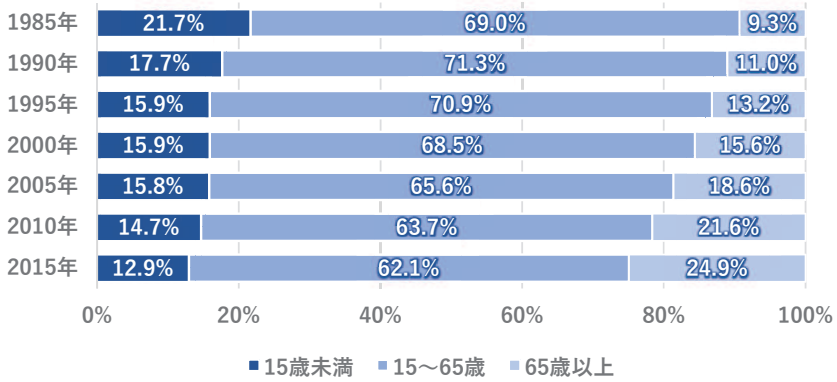


出典：国勢調査

図 1-7 人口・世帯数の推移

(2) 年齢別人口構成

年齢別人口構成は、平成27年(2015)の国勢調査によると、15歳未満が12.9%、15～65歳未満が62.1%、65歳以上が24.9%となっている（令和2年（2020）9月末時点の住民基本台帳人口は、15歳未満11.7%、15～65歳未満62.3%、65歳以上26.0%）。大阪府の人口構成（平成27年国勢調査）は、15歳未満が12.5%、15～65歳未満が61.3%、65歳以上が26.1%であり、府平均より高齢化は進行していないが、経年でみると、年少人口、生産年齢人口比率の減少と老年人口比率の増加傾向が続いており、昭和60年（1985）からの30年間で高齢化比率が2.5倍以上に上昇している。



出典：国勢調査

図 1-8 年齢別人口構成の推移

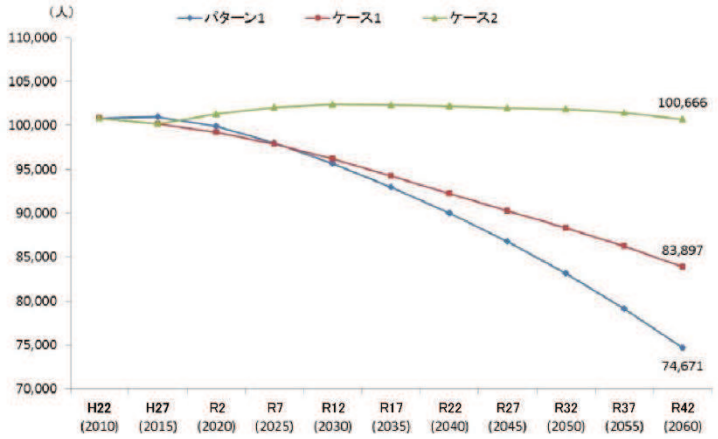
(3) 将来人口推計

国立社会保障・人口問題研究所による地域別将来推計人口（平成 30 年（2018）推計）では、泉佐野市の人口は平成 27 年（2015）以降減少していくことが予測されており、実際に令和 2 年 9 月末現在人口減少が続いている。

泉佐野市人口ビジョンでは、将来展望として、人口推計シミュレーションのケース 2 を採用して、合計特殊出生率を令和 22 年（2040）には 2.07 に引き上げることにより、自然減に歯止めをかけるとともに、社会増年 0.4%（約 400 人）を継続して新住民を増やしていくものとしている。将来展望としては、令和 42 年（2060）に 100,666 人としている。

ケース１	パターン１（社人研推計準拠）をベースに、令和 22 年（2040 年）に合計特殊出生率が人口置換水準の 2.07 まで上昇し、人口移動が均衡するケース ・令和 22 年（2040 年）の合計特殊出生率：2.07（人口置換水準） ・人口移動が均衡（社会増減がゼロ）
ケース２	ケース１に加えて、人口移動が増加するケース ・令和 22 年（2040 年）の合計特殊出生率：2.07（人口置換水準） ・人口移動　：　社会増加が毎年 0.4%上昇

図表Ⅱ-1-1-①　将来人口推計のシミュレーション



出典：泉佐野市人口ビジョン
※平成表記を令和表記に加工

図 1-9 人口推計シミュレーション

2−2 交通

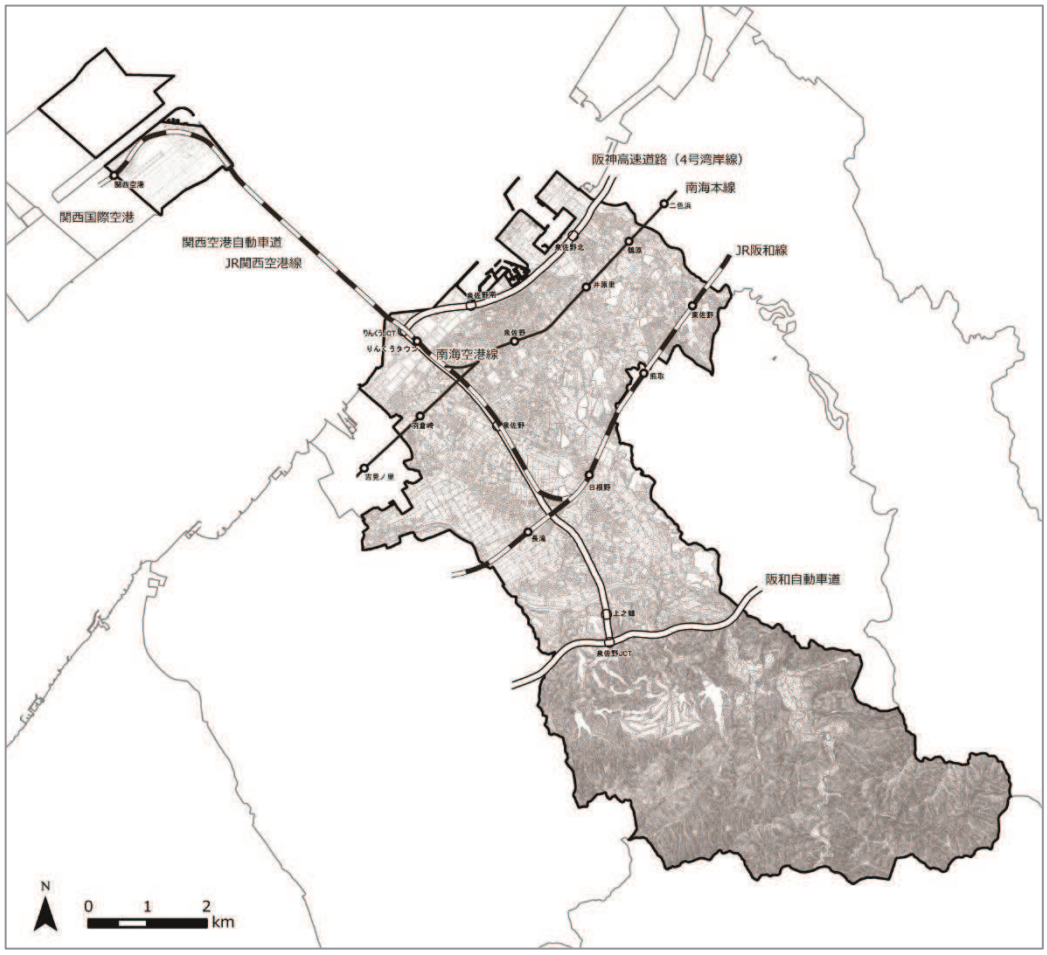
鉄道は、大阪市と和歌山市をつなぐ JR 阪和線（西日本旅客鉄道）、南海本線（南海電気鉄道）の両路線が市域を横断している。明治 30 年（1897）に南海電気鉄道が、昭和 5 年（1930）に阪和電気鉄道（現在の JR 阪和線）が開通した。両鉄道は、関西地域と関西国際空港を結ぶ主要な路線となっている。本市から大阪市内までは、電車で約 30 分の時間距離となっている。

自動車道においては、沿岸部に阪神高速道路が、市中心部に阪和自動車道が整備され、関西空港自動車道により関西国際空港とつながっている。空港からのシャトルバス等により、自動車道においても近畿を中心に広域的に結ばれている。

バス路線は、市内の生活路線として南海ウイングバス南部や市のコミュニティバスや観光周遊バス等が運行している。和泉山脈より北西側の平野部は網目状に路線整備されているが、重要文化的景観や犬鳴山のある大木地区や土丸地区へは、南海ウイングバス南部が運行しているのみであり、自家用車によるアクセスが中心となっている。

関西国際空港は平成 6 年（1994）に開港し、泉佐野市は日本の玄関都市として広域交通体系の結束点の役割を担い、様々な交通網が整備されている。

自転車については、KIX 泉州ツーリズムビューローが泉州地域（堺市以南 9 市 4 町）を周遊するサイクリングロードコースを設定しており、樫井川沿いに新たなコース設定が進められている。また、泉佐野市観光情報センターにおいてレンタサイクル事業「さのちゃり」も実施されている。



データ出典：国土数値情報（交通網・行政界）

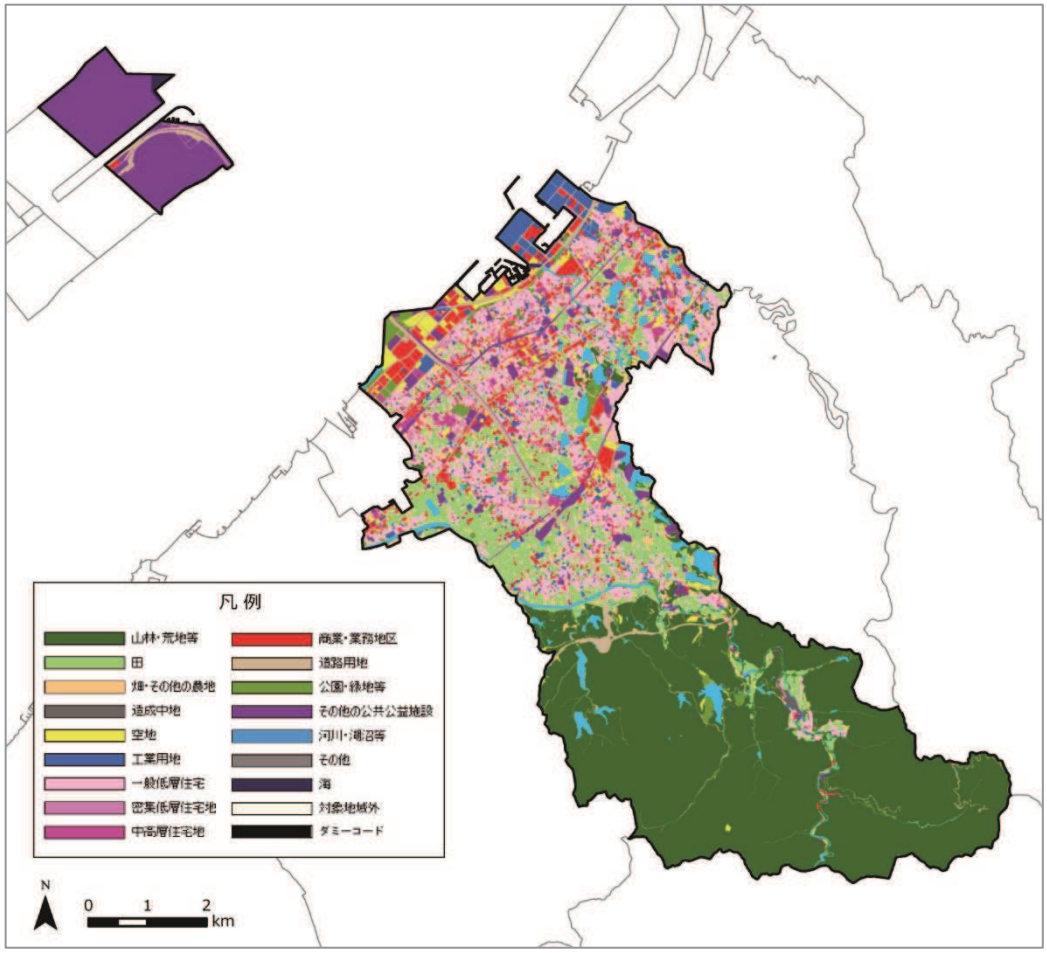
図 1-10 交通網の状況

2−3 土地利用

泉佐野市の南東部は、和泉山脈が広がり大半が森林となっており、一部がゴルフ場として利用されているものの、そのほとんどは自然緑地として維持されている。

和泉山脈から連なる丘陵地においては、田、その他の農用地としての利用が過半となっている。平野部においては、市街化が進んでおり、鉄道駅周辺を中心に商業地、および低層建物(密集地)、高層建物などの土地利用がみられる。

沿岸部においては、工場および高層建物の集積が見られる。



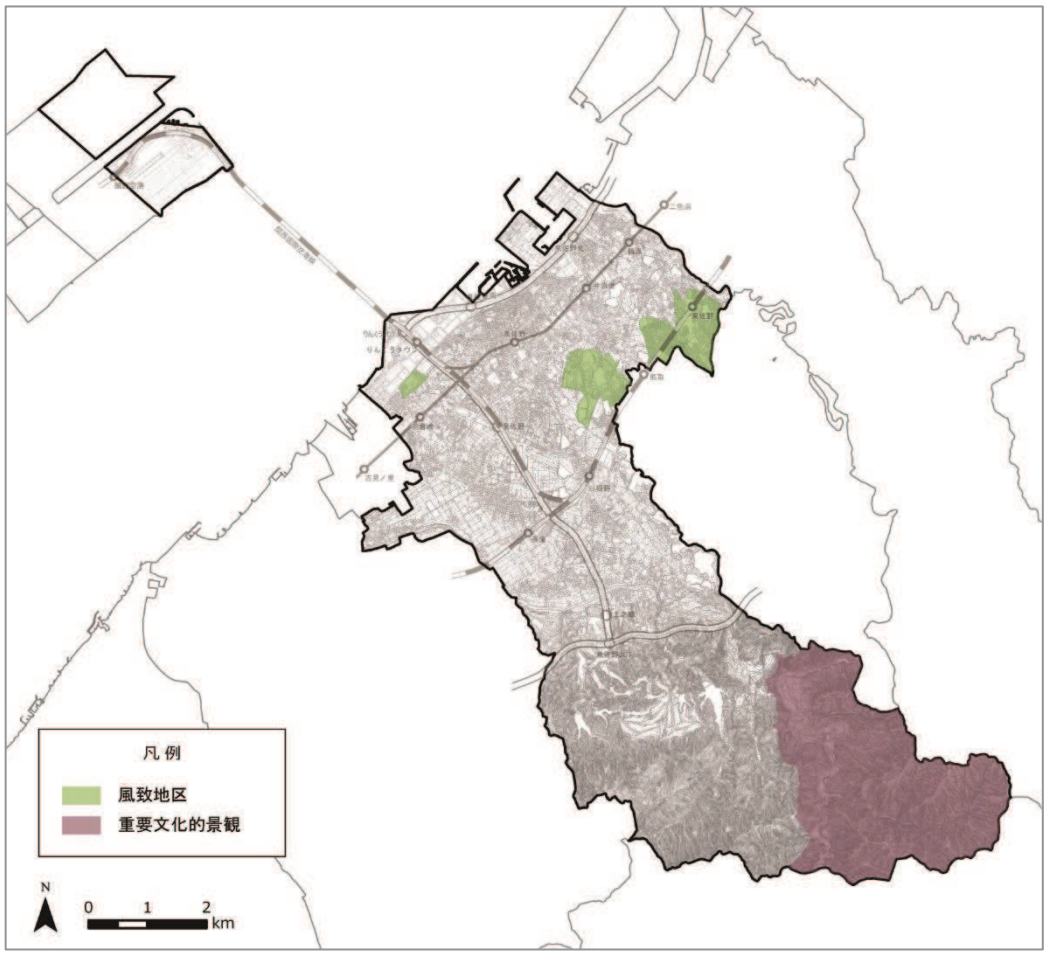
データ出典：数値地図 5000（土地利用）2008 年調査、国土数値情報（行政界）

図 Ⅰ-11 土地利用の状況

2−4 風致地区・文化的景観

泉佐野市内には、「新家山(平成 2 年（1990）告示)」、「檀波羅山(昭和 45 年（1970）告示)」、「佐野松原(昭和 14 年（1939）告示)」の 3 つの風致地区があり、合計指定面積は 204ha となっている。

また、市南東部に位置する大木・土丸地区内には、鎌倉時代から戦国時代にかけてこの地域にあった九条家領の荘園「日根荘」の遺構が現在も残されており、全国的にも有名な中世の荘園遺跡として、国の史跡に指定されている。また大木地区の農村景観が「日根荘大木の農村景観」として、平成 25 年（2013）に大阪府内で初めて重要文化的景観に選定された。



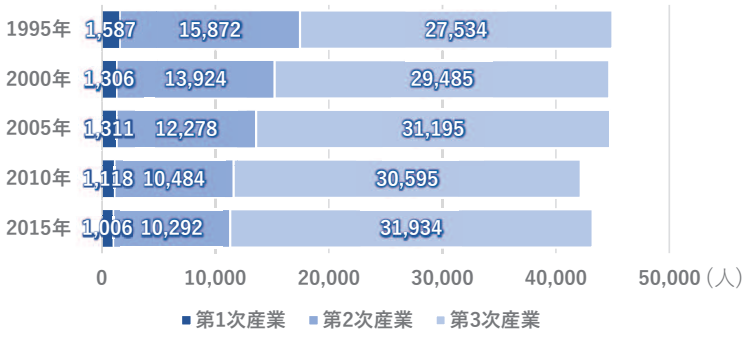
データ出典：市資料、国土数値情報（交通網・行政界）

図 1-12 風致地区・重要文化的景観

2−5 産業

(1) 産業別就業人口

産業別就業人口は、第 1 次産業、第 2 次産業ともに減少傾向にある。第 3 次産業は、平成 17 年（2005）から平成 22 年（2010）にかけて減少したが、インバウンド客増加に伴うホテル整備等により、平成 22 年（2010）から平成 27 年（2015）にかけて増加している。



出典：国勢調査

図 Ⅰ-13 産業別就業人口の推移

(2) 農業

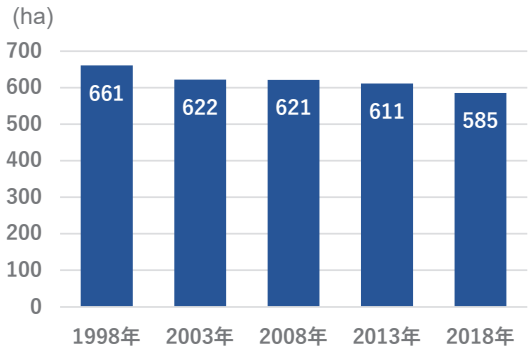
平成 27 年（2015）の総農家数は 1,029 戸、販売農家数が 501 戸、自給的農家数が 528 戸である。平成 7 年（1995）からの 20 年間で、総農家数は減少し、販売農家数が約 4 割減と、減少率が大きい。自給的農家数は約 4 割増となっている。平成 27 年（2015）の経営耕地面積は 488ha で、平成 2 年（1990）から約 2 割減となっている。耕地面積全体は、平成 5 年（1993）以降、減少傾向にある。

市内では、泉州（せんしゅう）タマネギや水ナス、キャベツに代表される泉州野菜（せんしゅうやさい）が栽培されている。

表Ⅰ−2 農家数・経営耕地面積の推移

	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年	2015 年	増減率 (1995→2015)
総農家数(戸)	1,184	1,072	1,024	1,080	1,029	−13.1%
うち販売農家数	802	689	613	545	501	−37.5%
うち自給的農家数	382	383	411	535	528	38.2%
経営耕地面積(ha)	584	529	482	497	488	−16.4%

出典：1995 年・2005 年・2015 年農林業センサス、1990 年・2000 年・2010 年世界農林業センサス



出典：作物統計調査

図 Ⅰ-14 耕地面積の推移

(3) 漁業

平成 30 年（2018）の漁業経営体総数は 59 経営体であり、平成 5 年（1993）からの 25 年間で、約 35%減、個人経営体数も約 35%減となっている。平成 30 年（2018）の保有動力漁船は 81 隻であり、平成 15 年（2003）をピークとして減少傾向にある。

泉佐野市を代表する水産物としては、泉（いずみ）だこやシャコ、ガザミ、がっちょがあげられる。

表 Ⅰ-3 漁業経営体数・保有漁船の推移

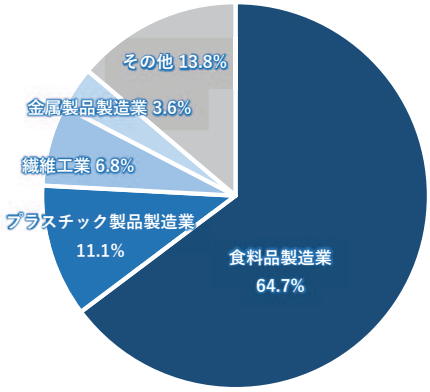
		2003 年	2008 年	2013 年	2018 年	増減率 (2003→2018)
漁業経営体数	総数（経営体）	91	76	72	59	−35.2%
	うち個人経営体	88	73	70	56	−36.4%
	うち共同経営	3	3	2	3	0.0%
保有漁船	動力漁船総数（隻）	119	82	96	81	−31.9%
	うち 1～5t 未満	9	3	5	6	−33.3%
	うち 5～10t 未満	105	77	85	69	−34.3%
	うち 10t 以上	5	2	6	6	20.0%

出典：漁業センサス

(4) 製造業

製造業における事業所数及び従業者数はともに減少傾向にあるが、製造品出荷額等は増加傾向にあるため、一事業所当たりの製造品出荷額等は増加傾向にある。一事業所当たりの従業員数も増加しており、大規模事業所が増加していることが予測される。

平成 30 年（2018）の工業統計調査によると、製造品出荷額等が多い主要な製造業は、食料品製造業である。臨海部に水産加工や食用油脂などの食品関連業者が集積する食品コンビナートが整備されており、製造品出荷額等の 64.7%を占めている。次いでプラスチック製品製造業、繊維工業となっている。特に繊維工業は、泉佐野市の特産品である泉州（せんしゅう）タオルを生み出す、近世から続く本市の特徴的な産業である。



出典：工業統計調査

図 Ⅰ-15 製造品出荷額等の内訳（平成 30 年（2018））

表Ⅰ−4 製造業における事業所数・従業者数・製造品出荷額等の推移

	2003 年	2008 年	2013 年	2018 年	増減率 (2003→2018)
事業所数（製造業）	353	294	217	186	−47.3%
従業者数（製造業）（人）	7,383	6,585	6,908	6,474	−12.3%
製造品出荷額等（万円）	22,064,855	24,130,851	23,254,408	26,077,400	18.2%
一事業所当たりの従業員数（製造業）（人）	21	22	32	35	66.4%
一事業所当たりの製造品出荷額等（万円）	62,507	82,078	107,163	140,201	124.3%

出典：工業統計調査

(5) 商業

小売業については、平成 16 年（2004）以降、事業所数、従業者数は減少傾向にあるが、年間商品販売額は増加傾向にある。一事業所数当たりの従業者数、年間商品販売額は増加傾向にあり、店舗の大型化が進む一方で、小規模経営の小売店が減少していることが読み取れる。

卸売業についても、平成 16 年（2004）以降、事業所数、従業者数は減少傾向にあるが、年間商品販売額は増加傾向にある。一事業所当たりの年間商品販売額は増加傾向にあることから、事業所の大型化、経営の効率化が進む一方で、小規模事業所が減少していることが読み取れる。

表Ⅰ−5 商業における事業所数・従業者数・年間商品販売額の推移

		2004 年	2007 年	2012 年	2014 年	2016 年	増減率 (2004→2016)
小売業	事業所数	1,117	1,088	709	784	837	−28.9%
	従業者数（人）	7,913	7,822	5,319	6,167	7,476	−5.5%
	年間商品販売額（百万円）	132,111	127,150	100,947	133,169	188,208	42.5%
	一事業所当たりの従業員数（人）	6.7	7.2	7.5	7.9	8.9	32.9%
	一事業所当たりの年間商品販売額（百万円）	112	117	142	170	225	100.3%
卸売業	事業所数	251	234	187	196	202	−19.5%
	従業者数（人）	2,059	1,822	1,124	1,460	1,631	−20.8%
	年間商品販売額（百万円）	103,273	90,859	84,716	98,046	131,149	27.0%
	一事業所当たりの従業員数（人）	8.2	7.8	6.0	7.4	8.1	−1.6%
	一事業所当たりの年間商品販売額（百万円）	411	388	453	500	649	57.8%
合計	事業所数	1,428	1,322	896	980	1,039	−27.2%
	従業者数（人）	9,972	9,644	6,443	7,627	9,107	−8.7%
	年間商品販売額（百万円）	235,384	218,009	185,663	231,215	319,357	35.7%

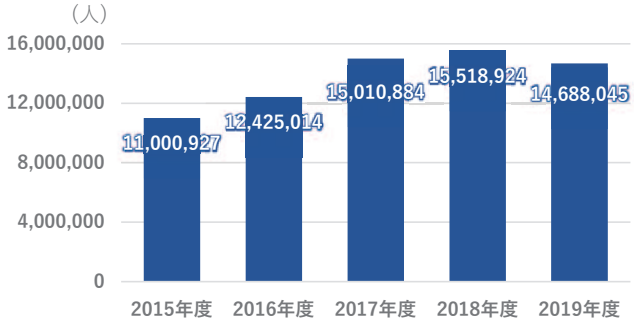
出典：商業統計調査・平成 24 年、28 年経済センサス活動調査

(6) 観光

平成 27 年度（2015）の関西国際空港の外国人旅客数は、1,100 万人の入国があり、平成 23 年度（2011）と比較して 824 万人増であり、4 年連続で増加を続けている。特に平成 26 年度（2014）から平成 27 年度（2015）にかけて大きく増加している。しかし、2019 年のインバウンド客の市内平均宿泊数は、関西国際空港という国際的な玄関港があるにも関わらず 1.2 泊にとどまっている。

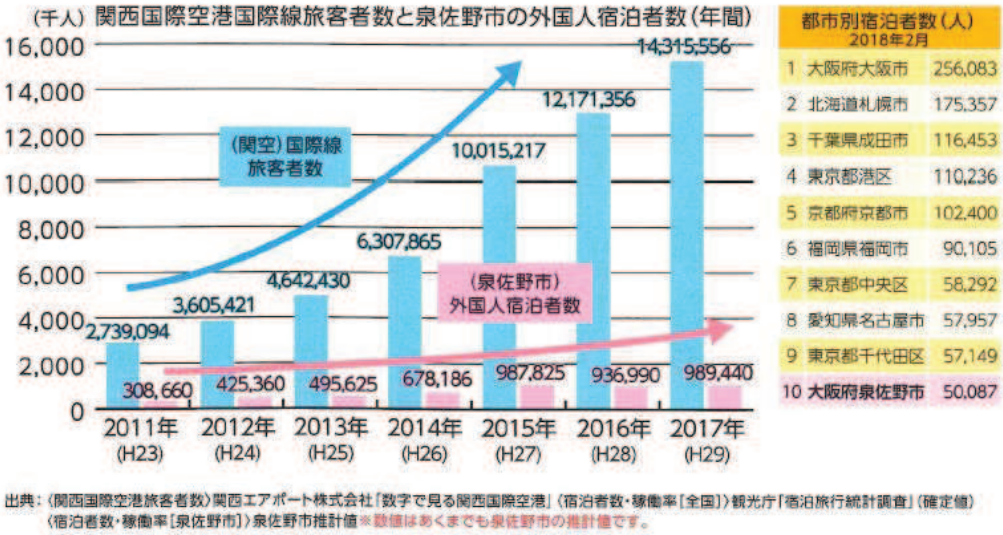
りんくうタウンや犬鳴山など集客性のある観光資源のある泉佐野市では、観光地域づくり候補法人（候補 DMO）である一般社団法人泉佐野シティプロモーション推進協議会と連携しながら、地域資源を活用した着地型の観光振興を進めている。市内観光を促すために、Wi-Fi 環境の整備や成長戦略である MICE※1 誘致と連携した観光振興、ユニークベニュー※2 の展開、マイクロツーリズムの推進などを進めている。これらの観光振興は、佐野町場での遊休不動産を活用したリノベーションまちづくりや、樫井川を基軸とした歴史資源や自然環境を活かしたツーリズムを展開している樫井川かわまちづくりなどの面単位でのまちづくりとも連携して進められている。また、日本遺産など泉佐野市の歴史文化資源の魅力を発信するために、大阪観光局等と連携して、日本遺産登録の公式ガイドブックの作成や東京などにおいて広域的な PR 事業を実施している。

※1：MICE とは、企業等の会議（Meeting）、企業等の行う報奨・研修旅行（Incentive Travel）、国際機関・団体、学会等が行う国際会議（Convention）、展示会・見本市、イベント（Exhibition/Event）の頭文字のことであり、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称（観光庁 HP より引用）
※2：ユニークベニューとは、「博物館・美術館」「歴史的建造物」「神社仏閣」「城郭」「屋外空間（庭園・公園、商店街、公道等）」などで、会議・レセプションを開催することで特別感や地域特性を演出できる会場（観光庁 HP より引用）



出典：平成 28 年 6 月関西エアポート株式会社プレス発表資料

図Ⅰ－16 関西国際空港の外国人旅客数の推移



図Ⅰ－17 泉佐野市の外国人宿泊者数の推移

(7) 特産品

泉佐野市の農業は、近世以降飛躍的に発展してきた。また、海に面していることから古来より漁業も盛んであり、泉佐野漁港は現在でも大阪府内で代表的な漁港の一つとなっている。近代以降は、泉州タオルなどの繊維産業が、戦後は伸線、鋼索工業が新たな地場産業として興った。

これらの特産品は泉佐野市の魅力ある地域資源であり、東京において「いずみさの特産品フェア」を開催するなど、広域的な PR 活動を行っている。

表Ⅰ−6 泉佐野市の特産品

種類		概要	
農産物	泉州タマネギ	泉州の玉ねぎ栽培は、外国より伝えられて間もない明治時代から、水稲の裏作として作られはじめたと言われている。水分が多く、甘みがあり、柔らかいのが泉州タマネギの特徴である。	
	水ナス	水ナス栽培の歴史は古く、平安時代にまで遡るともいわれている。泉州の気候、風土でしか育たないとも言われ、泉州代表の農産物となっている。水分を多く含み、皮が柔らかく、かみしめるほどにほのかな甘みのある風味、そして綺麗な紫の濃淡のある色艶が特徴である。浅漬けや糠漬けにして食されることもある。	
	キャベツ	泉州のキャベツは冬キャベツが主体で、「松波」という品種の栽培が中心になっている。非常に甘みがあるため、生でもおいしく食べられる。	
水産物	泉だこ	大阪府の南部泉州沖で漁獲されたマダコを大阪府内で加工した「ゆでだこ」である。平成 22 年（2010）5 月に、大阪府漁業協同組合連合会の「泉だこ」が地域団体商標として登録された。大阪湾はえさが豊富であり、潮の流れが穏やかであることから、泉州沖で漁獲されたマダコは、風味がよくやわらかい。	
	シャコ	「しゃこ」は、「えび」や「かに」と同じ節足動物である。体長 15cm 前後で身体は扁平で殻はかたく、目立った斑文などはない。泉州では塩茹などで食べるのが一般的である。	
	ガザミ	一般的には「ワタリガニ」と呼ばれる。昔から泉州でとれる食材で、だんじり祭でも縁起物として現在まで食され続けている。	

種類		概要	
水産物	がっちょ	正式には「ネズミゴチ」という体調 20cm 弱の魚であり、地方によって「めごち」と呼ばれる。大阪湾でよく取れる魚であるため、泉州の南側地域では昔からおやつ代わりに食されてきた。天ぷらや唐揚げなどにして提供されることが多い。	
産業特産品	泉州タオル	泉佐野市を含む泉州地域は、泉州タオル発祥の地として知られ、120 年余の歴史を誇る。今日も全国シェア約 42%を占める、我が国有数の産地である。製品は、後晒（あとさらし）タオルの特徴をいかし、独特の風合いで吸収性に優れている。平成 18 年度（2006）に「泉州こだわりタオルブランドの構築」事業が JAPAN ブランド育成支援事業に採択されており、地域ブランドとして確立するために各種事業が実施されている。	
	地酒	有限会社 北庄司酒造店（きたしょうじしゅぞう）では、大吟醸・吟醸・純米酒など高品質なお酒を手造りしている。酒蔵は昭和初期の木造建物で、1 階を酒造設備と売店、2 階は酒蔵を利用した、コンサートもできるホール「蔵しっくホール」となっている。	
工業製品	ワイヤーロープ	ワイヤーロープ産業は、泉佐野市を中心に一大産地を形成し、全国出荷額の 70%を占めている。ワイヤーロープは、吊橋やクレーン建設機械など建設重機分野や産業関連分野をはじめ、道路のガードケーブルやエレベーターなど生活の身近なところで活用されている。	
	シャットル	繊維産業が発展する中で、泉佐野市では原材料の綿栽培だけでなく織機の製造も行っていた。織機の横糸を通すシャットルの部品も製造されており、現在では、パイプラインに付着した酸化鉄を除去するための配管を走るシャットルへと用途を変えて、今なお生産されている。	
	ゴム	港が近く織機製造をはじめ産業集積があった泉佐野市では、多くの工場ができた。その中で、昭和 43 年（1968）に株式会社共和の自転車のタイヤ・チューブの主力工場として泉佐野工場が設立した。輪ゴムの「オーバンド」や「ビニタイ」等の生活用品を生産している。	

3. 歴史的背景

3－1 泉佐野市のあゆみ

（1）原始（旧石器・縄文・弥生・古墳・飛鳥）

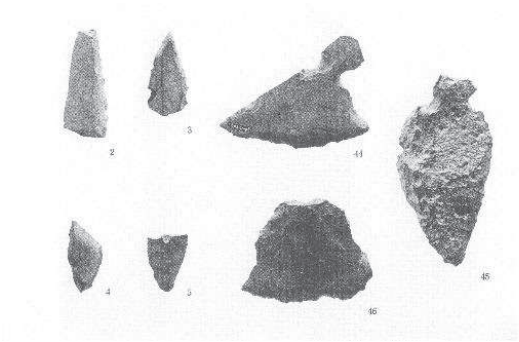
【人々の営みの開始】

泉州地域では、旧石器時代の石器が、主として台地・段丘上で出土している。泉佐野市では、樫井川右岸の中位段丘面に位置する長滝遺跡において、「谷地形（開析谷）」が確認され、その周辺では多くの石器が見つかっている。その中には、国府型ナイフ形石器が確認されていることから旧石器時代の人々の横断的な活動があった痕跡がうかがえる。

【集落の形成・信仰のはじまり】

縄文時代後期には、三軒屋遺跡で見られるように集落が設けられた。また、同時期に上之郷遺跡でも集落遺構が確認され、樫井川の水源を求めて集落が点々と成立してきたことがわかる。

三軒屋遺跡では、泉州地域では群を抜いた量の「石棒・石刀」が出土しているが、「祖霊祭祀」に使用される道具であると推定されていることから、縄文時代における人々の信仰の様子がうかがえる。



長滝遺跡（ナイフ形石器・尖頭器・石匙等）

三軒屋遺跡（石棒）

船岡山遺跡では、河内地方で作られた晩期の縄文土器が多く発見されており、地域間交流が盛んであったことが伺える。また、樫井川を隔てて西側に位置する氏の松遺跡（泉南市）では、東九州から瀬戸内にかけて流通していた弥生土器が確認されており、稲作文化が西から移動し樫井川下流域の平地部に伝播したことが想定される。

【稲作文化の伝来】

市域では、弥生時代の大規模な集落はこれまで確認されておらず、樫井川流域沿いに複数の中小規模集落が比較的近距離に存在していた。諸目遺跡では、住居跡及び水田跡の他、方形周溝墓群も見つかり、小規模ながら弥生時代のまとまった集落が成立していた。

当時の生活に適していた平地部の他、山間部にも集落が確認されている。弥生時代後期の棚原遺跡はいわゆる高地性集落であり、標高 75mの丘陵部に 2 棟の住居跡と狼煙台と考えられる遺構が検出されている。

棚原遺跡の高地性集落

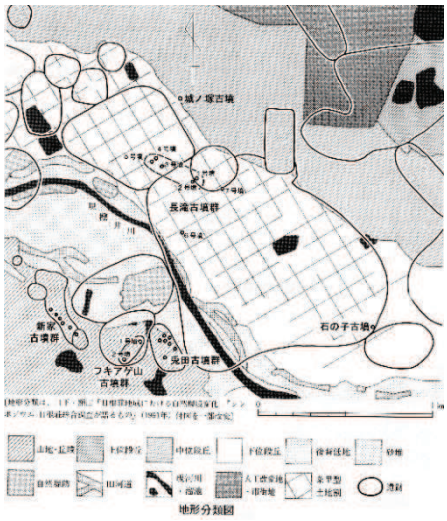
湊遺跡出土製塩土器

【製塩業の伝播】

大阪湾岸部では、弥生時代後期に盛んであった備讃瀬戸地域から製塩技術が伝来し、湊遺跡や松原遺跡からは多量の製塩土器が出土しており、製塩業が行われるようになる。

【集落から地域集団へ】

古墳時代になると、近畿でヤマト政権が誕生し各地で豪族等が出現し、前方後円墳を代表とする多くの古墳が築造された。泉佐野市でも地上部においては古墳の存在は確認されていないが、長滝・上之郷地域で墳丘が削平された古墳が次々に発見されている。これらは、長滝古墳群と称され、中期中頃から後期にかけての小古墳群であり、これらの被葬者一族は地域集団としての成長を遂げたものと考えられる。



長滝古墳群の位置図

長滝古墳群の供献品

【地域間交流の拡大】

古墳時代は、ヤマト政権の下、全国的に地域間交流が進むが、泉佐野市で出土する遺物や遺構からは、和歌山や四国の影響を受けているものも多くみられる。

古墳時代後期になると、横穴式石室を伴った石の子古墳が築造されたが、これには渡来系の有力氏族である「日根野造」が関わった可能性があることも指摘され、渡来人を含めた地域外からの移住者の痕跡も見られるようになった。

【茅渟宮】

日本書紀には、允恭天皇が寵愛した皇后の妹である弟姫（衣通姫）のために、允恭天皇 35 年（446）に茅渟宮を現在の泉佐野市上之郷に造営したことが「允恭紀」に記されている。現在当地には「茅渟宮址碑」が設置されている。

（2）古代（奈良・平安）

【律令体制下の泉佐野】

泉佐野市域は、律令体制下において河内国に属していたが、元正天皇が避寒用の離宮として「珍努宮」を設けるため、霊亀2 年（716）に大鳥郡・和泉郡・日根郡を「和泉監」という離宮警衛を担う特別行政区として独立させた。その後は、河内国に再編されるが、天平勝宝9 年（757）に和泉国に編入され、泉佐野市域は近代に至るまで和泉国日根郡に属していた。日根郡は、「近義・賀美・呼唹・鳥取」の 4 郷にわかれるが、賀美郷に日根郡の郡衙が設置され、その場所は泉佐野市長滝にあった禅興寺周辺だと考えられている。諸目遺跡では、関連すると思われる倉庫群が確認されている。

五畿七道では、泉佐野市域は特別区域である「畿内」に属していたので、中央官人への登用や租税制度（調は諸国の半分、庸は免除）の面で優遇を受けた。

諸目遺跡

同左（出土亀型須恵器）

【交通網の整備】

五畿七道内で国府を結ぶ形で官道の整備も進み、泉佐野市域を通る南海道は早くから和泉国や紀州国への行幸にも使われ、後に熊野大道となった。

平安時代になると、天皇をはじめ貴族も熊野詣を行うようになり、「茅渟道」や「熊野大道」沿いを中心に集落が増加した。延暦23 年（804）に、桓武天皇が和泉・紀伊の 2 カ国を行幸した際、泉佐野市域には「日根野行宮」が設置され日根野で狩猟を行った。また、歌人紀貫之が和泉国を訪れた際に、長滝にある「蟻通神社」でおきた事象について「蟻通明神」という和歌を謡んでいる。

院政期以降は、院・女院による熊野参詣が年中行事化し、泉佐野市域では「院熊野詣駅家雑事」を担っていた。

【港の整備】

泉佐野市域の沿岸部では、古代から製塩業や漁業などの活動が盛んであったが、律令体制の下、「網曳御厨」が設置され、朝廷に魚貝類を貢進していた。和泉国では、浦や湊も多く存在し、久安 3 年（1147）

の仁和寺宮覚性法親王の高野山参詣の際には、住吉浜から泉佐野市域の日根湊まで船で移動した記録がある。このことから、港は漁業だけでなく交通路としての機能も持っていたことがわかる。

【犬鳴山における葛城修験のはじまり】

犬鳴山の修験道は7世紀の中ごろ、役行者が開いたと伝えられている。葛城28宿修験根本道場として、古来有名であり、また「犬鳴」という名前の由来として、義犬伝説が今に伝えられている。ふもとの大木集落の人々にとって、水源である犬鳴山に対する信仰は極めて厚いものであった。中世末期の犬鳴山は葛城修験とともに人々の信仰に支えられ、隆盛を極めた。

【寺院の造営】

仏教公伝後まもなく、有力氏族などにより寺院の造営がはじまり和泉国でも飛鳥時代の終わりごろから寺院が建立された。奈良時代には、和泉国内では行基集団が寺院造営に取り組み、泉佐野市域では慶雲元年（767）に禅興寺が建立されたと伝えられる。

【泉佐野市域での土地開発のはじまり】

天平15年（743）の墾田永年私財法の発布に伴い、資本を持つ中央貴族・大寺社・地方豪族は活発に開墾を行い、大規模な私有地である荘園が畿内で続々と誕生した。泉佐野市域においても、長滝・上之郷では条里地割遺構が見られ、初期荘園の形成がはじまる。また、上之郷遺跡では10世紀後半の居館跡が確認されるなど、長滝・上之郷を中心に開発が進んだ様子がみられる。その後、永久4年（1116）に嘉祥寺領として日根荘が成立し藤原家領の長滝荘も成立した。

一方で、樫井川右岸部に展開する段丘上は、水がかりの悪い微高地が広がり、灌漑に必要な用水の確保が難しい保水力の弱い地盤であった。こうしたことから、耕作地としては不向きであり、日根野から鶴原地域の多くは未墾地のまま放置され、中世に至るまで荒野が広がっていた。

（3）中世（鎌倉・室町・安土桃山）

【九条家領日根荘の成立】

鎌倉時代に入って、高野山の僧侶が日根野の荒野の開発に着手した。しかし、長滝荘の禅興寺からの協力が得られず、開発は失敗に終わった。

和泉国は、元暦2年（1185）に九条兼実の知行国となり、天福2年（1234）に孫の九条道家が日根荘の開発を申請して官宣旨が下った。これによって、入山田・日根野・井原・鶴原の4ヶ村からなる九条家領日根荘が成立した。

【南北朝内乱期の泉佐野市域】

南北朝時代には北朝方である和泉国守護の高師泰が南朝からの攻撃を防ぐように日根野氏に「土丸城」の警護を命じた記録が残っている。このことから、長滝荘の荘官であった中原氏（後に日根野氏へ改名）が士族として台頭していたことがわかる。

土丸城は紀州と和泉を結ぶ粉河街道や河内へと通じる水間道などの主要街道の結節部に位置し、戦略上重要拠点であったため、観応の擾乱が開始すると、北朝方と南朝方の争奪戦に巻き込まれた。南北朝内乱が終焉を迎えると、守護が荘園を侵略するようになり、応仁の乱以後は、守護細川氏と根来寺の争乱に巻き込まれ、日根荘の九条家支配は崩壊しつつあった。

【前関白九条政基の入荘】

明応9 年（1500）に和泉国の乱により守護方や根来衆の荘園領地の押領が進み、九条家の荘園経営は窮地に陥った。また、同時期に九条政基は天皇の側近である唐橋在数を殺害したことで、勅勘を受け、朝廷での権力が弱まっていた。そうした状況の中、九条政基は謹慎の意を示し公家社会での九条家の復権を目指すことと日根荘の再建を目的に下向し、文亀元年（1501）3 月に日根荘へ入った。一旦日根野村に入ったその後、入山田村大木の長福寺を居所とし永正元年（1504）12 月まで滞在した。

その際に、書き記した「政基公旅引付」は荘園をめぐる荘園領主・室町幕府・守護などの動向、惣村の一揆・逃散などによる支配者への抵抗の動きをはじめ、ムラの人々の暮らしを詳細に記録した貴重な資料として知られる。

日根荘長福寺跡

土丸・雨山城跡

【九条政基帰京後の日根荘】

九条政基帰京後の日根荘は、代官の根来寺僧が支配を請け負った。根来寺僧は、和泉国南部の荘園や村に田地の加地子を買積していく一方、半済により荘園領主や守護の収納年貢高が減少したことで、日根荘は実質的に根来寺が支配していく。

【織豊政権下の泉佐野市域】

信長は天正5 年（1577）に根来寺や高野山等と手を結び紀伊雑賀一揆を起こした民衆を攻めた。その道中の佐野に陣を置いており、佐野在城衆と呼ばれる武士たちの協力を得ている。以後、和泉国は織豊政権の領地になり、天正 9 年（1581）に家臣堀秀政による和泉国での知行改めが行われたことで、根来寺と守護による和泉国支配体制は終焉を迎えた。

秀吉が朝鮮出兵をした際に、佐野の漁民は朝鮮派遣軍の水先案内を務めた。その功績により、佐野の漁民は対馬62 浦の漁業権が与えられた。

（4）近世（江戸）

【大坂夏の陣の緒戦「樫井合戦」】

関ヶ原の戦いで勝利した徳川方は、豊臣方へ国替えの要求をしたが拒否されたため、慶長20 年（1615）4 月に諸大名に大坂攻めを指示した。同年 4 月 29 日に大野治房率いる豊臣軍と浅野長晟率いる徳川軍が長滝の八丁畷で衝突した。八丁畷、船岡山、樫井一帯で激しい合戦が繰り広げられ、この大坂夏の陣の緒戦をおさめた徳川軍が勝利し、これ以後、徳川幕府による戦乱のない時代がはじまった。

【岸和田藩領としての泉佐野市域】

徳川家による幕藩体制が開始され、日根郡でも所領配置が行われた。同じ和泉国の大鳥郡・和泉郡は9割以上が幕府領であったのに対し、日根郡の約7割は岸和田藩領となり、残り3割が幕府領となった。日根郡は、岸和田藩にとっては比重の高い重要な地域であった。

【開発の完成】

中世以来、行われてきた泉佐野市域での荒野開発は、寛文12年（1672）の雨山溝の開削により樫井川河川灌漑と溜池が連結し水利体系が完成したことで大きく躍進した。

俵屋次郎左衛門により、溜池や湧き水を利用し俵屋新田の開発が進められ、新町も形成された。これによって、これまで農作地に不向きとされていた扇状地で、農地を拡大させることに成功した。水利体系の完成や新田開発には、巨大資本が必要となるが、岸和田藩だけでなく漁業・廻船業で成功した佐野の資本力が影響していたと考えられる。

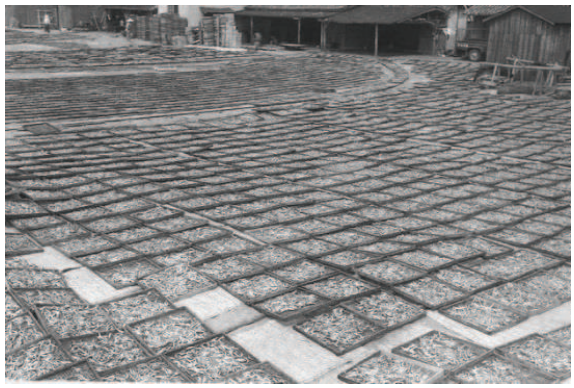
【佐野村の発展】

中世から全国各地に出漁していた佐野は、江戸時代に入ると食野家をはじめとする「食一統」と呼ばれる豪商たちにより廻船業が発展した。とくに食野は、岸和田藩の流通機能を担うだけでなく、新田開発や土地集積で財をなし「和泉屋」と称して大坂や江戸で出店を構え、諸大名に大名貸しを行い、江戸時代の経済を支えるまでに成長した。

廻船業の成長に伴い、佐野では製糖・酒醸造・造船から鍛冶、大工・織物業などの多様な職業が発達し、集落も増加し佐野村から佐野町場と言われるまでに発展した。大工に関しては、寺社建築を行っていた「佐野組」が台頭しており、その影響を受けた職人たちの中には農機具を作るものがあらわれ、泉佐野市域での農業の生産性向上に貢献した。

佐野では漁業・廻船業だけでなく、綿花栽培も発展した。綿花栽培に必要な肥料である干鰯は鰯から作られるので、近くで調達できる佐野の農家は綿花栽培を開始し、16万反の収穫があった。

佐野浦



さの漁村の干鰯場

（5）近代（明治・大正・昭和戦前）

【泉州タオルの誕生】

江戸時代に発展した綿花栽培は、農家の農閑余業として織物業が普及し和泉木綿を生産するようになった。明治時代に入ると、織機の「バッタン」が導入されさらに生産量を拡大した。

明治20年（1887）には、木綿織物業を営む佐野の里井圓治郎氏がパイル作りに成功し、タオル製織を開始した。

【日本一の玉ねぎ生産地】

明治時代から今井親子によって、玉ねぎの栽培が開始された。当時は、大阪府内では泉州地域でしか玉ねぎの栽培は行われていなかったが、明治 26 年（1893）に大阪市を中心に赤痢が流行し、玉ねぎが効くという噂が広まったことで、玉ねぎの価格は高騰し泉佐野市内でも栽培を始める農家が増加した。大正 2 年（1913）の害虫問題により一時、生産量は激減する。しかし、その玉ねぎの種子を淡路島をはじめ全国各地へ移植したことから、今日流通している玉ねぎのルーツは泉州タマネギという産地も多くある。

【交通網の発展】

明治 30 年（1897）に南海鉄道の難波 - 佐野間が開通し、昭和 5 年（1930）には阪和電気鉄道（現在の JR 阪和線）が開通した。鉄道の発展により、駅周辺には商店街がひろがり、商店だけでなく歓楽街の新地や映画館ができるなど大いに賑わいをみせた。

【犬鳴登山バスの運行】

大正時代になって自動車が普及したことから、観光地への交通整備が全国各地へと拡大した。泉佐野市域では、古くから犬鳴山への参詣者を集めていたが、大正 14 年（1925）に藤原梅吉氏が「犬鳴登山自動車商会」を設立し、南海佐野駅を起点とした乗合自動車の運行を開始した。後の昭和 31 年（1956）には、大阪府の温泉認可第 1 号となる「犬鳴温泉」が開業し、観光地化が進んだ。

犬鳴登山バス

（6）現代（昭和戦後・平成）

【稲倉池用水パイプラインの完成】

「府営泉佐野市外 1 力町用水改良事業」として、昭和 17 年（1942）にかん漑用水路として着工した。戦争による資財や労力の不足、戦後の混乱などのため工事は一時中断したが、昭和 25 年（1950）に再開され、昭和 32 年（1957）に完成した。稲倉池を親池に、大細利池、唐池、布池、末広池などの小池と結び、中央で流量を調整しながら関連する農耕地約 166ha を潤している。

【泉佐野食品コンビナートの造成】

コンビナートは市の海岸部に位置し、りんくうタウンに隣接する総面積 115ha の臨海産業地域である。当初は遠洋漁業の基地として計画されていたが、社会情勢の変化にともない、昭和 38 年（1963）から近畿圏の食品需要に対応する総合食品コンビナートとして整備された。

水産加工、食用油脂、精糖などの工場が操業中で、アジアの食料品供給基地として発展を続けている。道路や下水処理、厚生施設などが整備されているほか、泊地面積 44ha、重量 25,000 トン級の船が自由に入港できる港があり、国際港にも指定されている

【関西国際空港の開港】

平成 6 年（1994）に関西国際空港が開港したことで、鉄道施設では、JR 関空線と南海空港線が開通し、高速道路では阪神高速湾岸線と阪和自動車道、関西空港自動車道などの広域交通網が整備された。

【りんくうタウンの開発】

1980 年代末から泉州空港(関西国際空港)の機能支援や補完、および地域の環境改善を目的として南大阪湾岸整備事業を行った。本市、泉南市、田尻町の湾岸 318.4ha を埋め立て、本市では商業ゾーンを中心に国際ビジネス・エリアが構築されている。また、陸地と新空港島を結ぶ空港連絡橋の基点となり、関西空港自動車道や阪神高速湾岸線の合流地点にもなっており、「ヒト・モノ・情報」が交錯する国際交流の拠点として機能している。

平成 31 年（2019）12 月には、通年型のアイススケートリンクとして「関空アイスアリーナ」が開業し、住宅棟とホテル及び展示会場で構成される複合施設の整備も計画されている。また、平成 30 年（2018）に策定した「地域活性化総合特別区域計画」に基づき、特区として通訳案内士の規制緩和など様々な特例措置を受けながら、国際医療交流の拠点づくりとして、国際医療交流の推進や急増する訪日外国人を受け入れる取組みを大阪府と連携して進めている。

これまで、熊野街道や葛城修験の道及び海路を通じて、全国各地へヒト・モノ・カネ等を運んでいた泉佐野市の役割は、現代にも受け継がれ、今は国内だけでなく世界をつなぐ拠点として機能している。

泉佐野市と関西空港

りんくうタウン

3−2 泉佐野市の簡略年表

区分 時代	原始 旧石器時代、縄文時代、 弥生時代、古墳時代、飛鳥時代	古代 奈良時代、平安時代	中世 鎌倉時代、室町時代、 安土桃山時代
泉佐野市域のできごと	**【人々の営みの開始】** ・ナイフ形石器の出土（長滝遺跡） **【集落の形成・信仰のはじまり】** ・樫井川の水源を求めて集落形成（三軒屋遺跡、上之郷遺跡） ・祖霊祭祀に使用される石棒の出土（三軒屋遺跡） **【稲作文化の伝来】** ・水田跡の出土（三軒屋遺跡） ・高地性集落の形成（棚原遺跡） **【製塩業の伝播】** ・製塩土器の出土（湊遺跡、松原遺跡） **【集落から地域集団へ】** ・墳丘が削平された古墳の出土（長滝古墳群） **【地域間交流の拡大】** ・和歌山や四国からの影響を受けた遺物や遺構の出土 ・渡来系氏族「日根野造」が関与した横穴式石室の造営 **【茅渟宮】** ・446 年允恭天皇による茅渟宮造営	**【律令体制下の泉佐野市域】** ・716 年「和泉監」の設置 ・757 年「和泉国」へ編入、和泉国日根郡へ **【交通網の整備】** ・五畿七道内での官道の整備 ・天皇家、貴族による熊野詣の開始 →「茅渟道」や「熊野大道」沿いに集落が増加 ・804 年桓武天皇による「日根野行宮」の設置、日根野狩猟の実施 ・歌人紀貫之による「蟻通神社」の来訪 →和歌「蟻通明神」 **【港の整備】** ・「網曳御厨」の設置 **【犬鳴山における葛城修験のはじまり】** ・犬鳴山の修験道の開山 **【寺院の造営】** ・767 年行基集団による「禅興寺」建立 **【泉佐野市域での土地開発のはじまり】** ・長滝・上之郷の開発	**【九条家領日根荘の成立】** ・高野山僧侶による日根野の荒野開発 →長滝荘の禅興寺からの協力が得られず失敗 ・1234 年九条道家が日根荘の開発申請、入山田・日根野・井原・鶴原の 4 村からなる九条家領「日根荘」が誕生 **【南北朝内乱期の泉佐野市域】** ・長滝荘荘官の中原氏（後の日根野氏）が土族として台頭 ・築城の開始（土丸城など） **【前関白九条政基の入荘】** ・1500 年前関白九条政基の日根荘入荘（長福寺） →「政基公旅引付」を書き記す **【九条政基帰京後の日根荘】** ・日根荘の支配は根来寺へ移る **【織豊政権下の泉佐野市域】** ・1577 年織田信長による紀伊雑賀一揆攻め →佐野在城衆の協力 ・1581 年堀秀政による和泉国での知行改め →織豊政権下へ ・豊臣秀吉の朝鮮出兵時に佐野の漁民が朝鮮派遣軍の水先案内を務めた
日本のできごと	57 年　中国の光武帝が奴国に金印を授ける 107 年　倭国王帥升が後漢に使者を送る 150 年　頃倭国大乱 239 年　邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送る 391 年　高句麗へ出兵 527 年　筑紫国造磐井の乱 538 年　百済から仏教伝来 593 年　聖徳太子が推古天皇の摂政に 603 年　冠位十二階制定 604 年　17 条憲法制定 645 年　大化の改新 663 年　白村江の戦い 672 年　壬申の乱 694 年　藤原京遷都 701 年　大宝律令制定	710 年　平城京遷都 723 年　三世一身の法発布 729 年　長屋王の変 740 年　藤原広嗣の乱 743 年　墾田永年私財法発布 757 年　養老律令施行 橘奈良麻呂の変 784 年　長岡京遷都	794 年　平安京遷都 797 年　坂上田村麻呂を征夷大将軍に任命 894 年　遣唐使廃止 902 年　延喜の荘園整理令 1016 年　藤原道長、摂政になる 1069 年　延久の荘園整理令 1086 年　白河上皇、院政開始 1156 年　源平合戦 1167 年　平清盛、太政大臣となる 1185 年　壇ノ浦の戦 1189 年　源頼朝、奥州平定 1232 年　貞永式目制定 1333 年　新田義貞が鎌倉を攻め落とす（鎌倉幕府滅亡） 1334 年　建武新政 1338 年　足利尊氏が征夷大将軍となる（室町幕府開始） 1392 年　南北朝合一 1404 年　勘合貿易開始 1467 年　応仁の乱勃発 1543 年　鉄砲伝来 1549 年　キリスト教伝来 1560 年　桶狭間の戦い 1582 年　本能寺の変 1585 年　豊臣秀吉関白就任 1588 年　刀狩令発布 1591 年　身分統制令

区分 時代	近世 江戸時代	近代 明治時代、大正時代、昭和時代（第二次世界大戦終戦前）	現代 昭和時代（第二次世界大戦終戦前）、平成時代
泉佐野市域のできごと	**【大坂夏の陣の緒戦「樫井合戦」】** ・1615 年　大野氏率いる豊臣軍と浅野氏率いる徳川軍が衝突し樫井一帯で合戦が繰り広げられる **【岸和田藩領としての泉佐野市域】** ・徳川家による幕藩が開始、所領配置で日根郡は岸和田藩領へ **【開発の完成】** ・1672 年雨山溝の開削 →樫井川河川灌漑と溜池が連結し水利体系が完成 ・俵屋次郎左衛門による俵屋新田の開発 **【佐野村の発展】** ・「食一統」と呼ばれる豪商たちによる廻船業の発展 ・「佐野組」の台頭 →寺社建立や農機具製作 ・綿花栽培の発展	**【泉州タオルの誕生】** ・織機「バッタン」の導入による和泉木綿の生産量拡大 ・1887 年里井圓治郎氏によるパイル作りの成功 →タオル製織を開始 **【日本一の玉ねぎ生産地】** ・今井親子による玉ねぎ栽培の開始 ・1893 年赤痢流行の特効薬として玉ねぎの生産量拡大 ・1913 年玉ねぎの害虫問題による生産量の激減 →淡路島など全国へ玉ねぎの種子を移植 **【交通網の発展】** ・1897 年南海鉄道の難波 - 佐野間が開通 ・1930 年阪神電気鉄道（現在の JR 阪和線の開通） **【犬鳴登山バスの運行】** ・1925 年藤原梅吉氏が「犬鳴登山自動車商会」を設立 →南海佐野駅を起点とし乗合自動車の運行を開始 ・1956 年大阪府の温泉認可第 1 号「犬鳴温泉」が開業	**【稲倉池用水パイプラインの完成】** ・1957 年稲倉池を親池に、大細利池、唐池、布池、末広池などの小池を結び、かん漑用水路として整備 **【泉佐野食品コンビナートの造成】** ・1963 年から近畿圏の食品需要に対応する総合食品コンビナートとして開業 **【関西国際空港の開港】** ・1994 年関西国際空港開港 ・阪神高速湾岸線、阪和自動車道、関西空港自動車道などの広域交通網の整備 **【りんくうタウンの開発】** ・「ヒト・モノ・情報」が交錯する国際交流の拠点として開発（現在も開発は継続） **【日根荘の史跡指定・文化的景観選定】** ・1998 年「日根荘遺跡」が国史跡に指定 ・2005 年・2013 年「日根荘遺跡」に追加指定 ・2013 年「日根荘大木の農村景観」が重要文化的景観に選定 **【歴史館いずみさの開館】** ・1996 年歴史や文化に関わる展示施設「歴史館いずみさの」開館 **【日本遺産の認定】** ・2019 年『旅引付と二枚の絵図が伝えるまち－中世日根荘の風景－』が日本遺産認定 ・2020 年『荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間　～北前船寄港地・船主集落～』に泉佐野市が追加認定 ・同年に『「葛城修験」－里人とともに守り伝える修験道はじまりの地』が日本遺産認定
日本のできごと	1600 年　関ヶ原の合戦 1603 年　徳川家康が征夷大将軍就任（江戸幕府開始） 1614 年　大坂冬の陣 1615 年　大坂夏の陣 一国一城令発布、武家諸法度・禁中並公家諸法度制定 1673 年　分地制限令を制定 1685 年　生類憐みの令発布 1723 年　足し高の制制定 1787 年　老中松平定信による寛政の改革開始 1830 年　老中水野忠邦による天保の改革開始 1853 年　ペリー来航 1854 年　日米和親条約締結 1858 年　日米修好通商条約締結 1867 年　大政奉還	1868 年　戊辰戦争開始 1869 年　版籍奉還 1871 年　廃藩置県 1873 年　地租改正 1889 年　大日本帝国憲法発布 1894 年　日清戦争開戦 1905 年　日露戦争開戦 1910 年　韓国併合 1914 年　第一次世界大戦開戦 1931 年　満州事変 1937 年　日中戦争開戦 1941 年　太平洋戦争開戦 1945 年　第二次世界大戦終戦	1951 年　サンフランシスコ講和会議(対日平和条約・日米安全保障条約締結) 1956 年　国際連合加盟 1964 年　東京オリンピック開催 1970 年　大阪万博開催 1972 年　沖縄返還 日中国交正常化 1987 年　国鉄の分割民営化 1994 年　関西国際空港開港 1995 年　阪神淡路大震災 1998 年　長野オリンピック開催 2011 年　東日本大震災 2016 年　熊本地震 伊勢志摩サミット 2018 年　平成 30 年 7 月豪雨 北海道胆振東部地震 2019 年　令和へ改元 2020 年　新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行